



國史學要

後村上至後土御門

卷七

甲
第
十
三
卷

リ 5
16
7



伊5
門
號 16
卷 7

國史攬要卷之七

○十四年 北朝延文四年八月菊池武光懷良親王ヲ奉

少貳賴尚ト筑後河津戰テ大ニ之ヲ破ル先是武光兄武

重ニ嗣テ其衆ヲ領シ屢ニ賊ト戰ヒ筑紫探題一色直氏

ヲ攻テ之ヲ破リ又畠山國久ヲ日向ニ討テ之ヲ走ラス

是歲八月賴尚兵六萬ヲ率テ來リ攻ム武光八千人ヲ發

シ親王ヲ奉ノ敵ト筑後河津夾テ陣ス武光ノ兵河ヲ涉

テ之ヲ擊ツ賴尚退テ大原ニ陣ス武光夜ル其子武政等

ヲ遣テ之ヲ襲ヒ其二子ヲ斬ル武光軍ヲ麾テ之一乘シ



在間 棚谷元善



國史攬要

後村上

大ニ戰フ、武光衆ニ先テ奮進シ、遂ニ大ニ之ヲ破リ、斬首
三千六百級、官軍死スル者亦々千餘人、親王劊ヲ蒙ル、賴
尚逃レテ太宰府ニ還ル、先是北畠頭信、兵ヲ起シ、結城氏
ト戰ヒ利アラズ、走テ吉野ニ歸リ、遂ニ鎮西ニ來テ、武光
ニ依ル、是戰ニ奮闘メ之ニ死ス、○十月、鎌倉ノ宰、畠山國
清、關東ノ兵六萬ヲ率テ西ニ上リ、義詮ト共ニ行宮ヲ犯
サント欲ス、楠正儀、和田正武ト入テ奏メ曰、國清大舉メ
來リ犯ス、然レ彼レ天時地理人和ニ違フ、百萬ノ衆有リ
ト雖レ恐ル、ニ足ラス、車駕宜ク觀心寺ニ幸スヘシ、臣
等若ク築キ土兵ヲ誘ヒ、出沒變化メ、彼ヲメ氣屈メ退カ

シタニ、帝之ニ從フ、○十五年、北朝廷文五年、正月、楠正儀
赤坂城ニ據リ、平岩八尾龍門ノ諸若ク修メ、兵ヲ分テ之
ヲ守ル、二月、義詮國清、兵三十萬ヲ合メ來リ攻ム、正儀正
武屢々之ヲ破ル、四月、賊ノ一軍、龍門山ヨリ入ル、藤原隆
俊擊テ之ヲ走ラス、己ニノ隆俊敗ル、陸良親王ニ興良
ニ救メ之ヲ救フ、親王賊ニ通メ行宮ヲ焚ク、關白師基之
ヲ擊ツ、親王敗レテ走ル、己ニノ諸若皆陥リ、五月、賊合メ
赤坂ヲ攻ム、正儀正武退テ金剛山ニ入ル、賊軍引テ還ル
○七月、正儀兵ヲ攝津ニ出シテ、譽田城ヲ攻ム、國清來リ
援ス、己ニノ兩軍交リ退ク、仁木義長歸順ス、義長ハ賴章

後村上

ノ弟ナリ、兄ニ代テ執事ト爲リ、賞罰意ニ任ス、國清ノ京師ニ入ルヤ、其專横ヲ見テ之ヲ惡ム、佐々木道譽細川清氏亦々義長ト相軋ス、因テ國清ニ結テ、潜カニ之ヲ除シ、謀ル、官軍譽田城ヲ攻ルニ及テ、應援ニ託シ、還テ之ヲ除ントス、義長之ヲ聞テ、兵ヲ以テ義詮ノ弟ヲ守リ、將士ノ出入ヲ禁ス、道譽夜ル潜カニ入り、義詮ニ勸メテ後門ヨリ逃レ出テシメ、乃チ義長ト共ニ語テ夜半ヲ至リ退キ出ツ、義長臥内ニ入レハ一人ヲ見ヌ大ニ驚ク、將士之ヲ聞テ皆散以ス、義長殘兵ヲ率テ伊勢ニ奔リ、是ニ至テ來リ降ル、○楠正儀水速城ヲ攻テ之ヲ拔キ、山名時氏

亦々赤松貞範カ六城ヲ拔ク、八月、所在ノ官軍兢ヒ起リ、京師險獲ス、人皆咎テ國清ニ歸ス、國清好テ狐皮ヲ以テ腰ヲ蔽フ、時人乃チ狐媚ノ歌ヲ作り、唱ル者衢ニ滿ツ、國清禍ノ及シテ懼テ、潜カニ逃レテ鎌倉ニ還ル後チニ基氏之ヲ逐フ、伊豆ノ修禪寺ニ據テ叛キ、戰ヒ敗レテ京畿ニ走リ、竟ニ餓死ス、○十六年 北朝康安元年 七月、山名時氏、美作ノ八城ヲ降シ、遙カニ義長ニ應ヌ、兵勢大ニ振フ、○八月、菊池武光、松浦黨ヲ飯盛山ニ擊テ之ヲ走ラセ、又大友少貳ト戰テ大ニ之ヲ破ル、○九月、楠正儀、和田正武、兵ヲ攝津ニ出シ、佐々木秀詮ト戰テ之ヲ破リ、秀詮及

其弟氏詮ヲ斬ル、二人道譽ノ孫ナリ、先是道譽赤松光
範カ、攝津ノ守護職ヲ奪テ、之ヲ二人ニ授ク、是ニ至テ並
ニ死ス、○十月、細川清氏歸順ス、先是清氏、仁木義長ニ代
テ執事タリ、道譽又々之ヲ忌ミ、其異心アルヲ諳シ、詭計
ヲ以テ之ヲ陥ル、清氏人ヲ以テ之ヲ辩解セシム、聽カス
乃チ若狹ニ走リ、其弟將氏ヲ留メテ、異志無キヲ證ス、又
聽カス、遂ニ兵ヲ以テ之ヲ討ツ、清氏乃チ來リ降ル、因テ
奏メ曰、足利氏ノ兵、西ハ時氏ヲ拒ミ、東ハ義長ニ備ヘ、京
師空虚ナリ、臣請フ之ヲ復セシ、朝議其言ニ從フ、○十一
月、正儀等ノ諸將ニ敕メ、兵ヲ以テ清氏ヲ助ケシム、十二

月、義詮敢テ拒戰セシ、帝ヲ奉メ、道譽等ノ諸將ト近江ニ
奔ル、官軍京ニ入テ、諸將ノ第ヲ燒ク、道譽走ルニ臨テ其
第ヲ洒掃シ、僧二人ヲ留メ、酒ヲ大甕ニ貯ヘテ師ヲ饗セ
シム、正儀乃チ鎧刀ヲ置テ之ニ報ス、清氏其第ヲ焚ント
ス、正儀之ヲ止ム、己ニ赤松氏範、海路ヨリ行宮ヲ犯ス
ヲ聞キ、諸將皆引テ還ル、官軍京ニ留ル、僅ニ十九日、初
メ清氏ノ京師ヲ復セント請フヤ、帝之ヲ正儀ニ問フ、正
儀對テ曰、王師嘗テ京師ヲ攻メ、五ツタヒ得テ五ツタヒ
失フ、今之ヲ得ント欲セハ、臣一人ニノ復ス可シ、必スシ
モ清氏ノ力ヲ假ラス、唯恐クハ之ヲ得テ復タ之ヲ失ハ

國史綱目 卷七

○後村上 四

ニ耳ト朝議聴カス、是ニ至テ果ノ其言ノ如シ、○十七年
北朝貞治元年 正月、細川清氏阿波ニ赴キ、白峰城ニ據テ、
四國ヲ徇フ、○山名時氏、兵ヲ分テ備前備中ヲ徇フ、足利
直冬、石見ノ兵ヲ以テ之ヲ助ク、○七月、義詮、細川賴之ニ
命メ、清氏ヲ圖ラシム、賴之城壘未タ全カラス、因テ其母
ヲ遣テ、清氏ニ説クニ禍福ヲ以テス、徃復ノ間、守備悉ク
成ル、因テ之ヲ絶キ、偽兵ヲ設テ其勢ヲ分タシメ、急ニ新
開直行ト、白峰城ヲ夾ミ攻ム、清氏素ヨリ輕慄勇ヲ恃ミ、
馳セテ城門ヲ出ツ、馬矢ニ中テ斃レ、兩騎ト搏戦ヲ死ス、
弟氏春和泉ニ奔リ、四國盡ク陥ル、○九月、楠正儀和正

武佐々木氏ノ兵ヲ神崎ニ撃テ之ヲ破リ、又赤松ノ一城
ヲ拔ク、是月、菊池武光、鎮西探題足利氏經ヲ逆ニ撃ツ、氏
經敗レテ京師ニ還ル、○十九年 北朝貞治三年 春、先是大
内弘世、久ク官軍ニ屬ス、是歲、周防長門ヲ以テ、叛テ義詮
ニ降ル、義詮乃チ二州ノ守護ヲ授ク、山名時氏亦タ叛テ
義詮ニ降リ、因テ略スル所ノ地ヲ請フ、義詮乃チ因幡伯
耆丹波丹後美作五州ノ守護トナス、己ニノ仁木義長、石
堂賴房等、皆義詮ニ降リ、菊池武光亦タ病テ卒ス、是ヨリ
官軍益々振ハス、○二十二年 北朝貞治六年 四月、足利基
氏卒ス、基氏ハ尊氏ノ子ナリ、善ク義詮ノ爲ニ関東ヲ鎮

ノ舊業ヲ失ハス、子氏滿嗣テ管領ト爲ル。○十二月、北朝ノ將軍足利義詮卒ス。年三十八。初メ義詮、佐々木道譽ヲ以テ、執事ト爲シ、ト欲ス。基氏、細川頼之ヲ薦ム、乃チ管領ヲ執事ノ稱ト爲シ、テ義滿ヲ輔ク。義詮終ニ臨テ、義滿ニ謂テ曰、汝ニ一父ヲ與フ、善ク之ニ仕ヘヨ。頼之ニ謂テ曰、汝ニ一子ヲ付ス、善ク之ヲ視ヨト。於是頼之心ヲ竭メ、義滿ヲ輔導シ、方正ニノ文武ノ材アル者ヲ撰テ、左右ニ侍セシメ、又便佞ナル者六人ヲ以テ、髮ヲ削テ、諸將ノ弄客ト爲シ、佞童坊ト名ツケ、士ノ佞媚ナル者有レハ、呼テ士童坊ト稱ノ之ヲ辱シム。士風大ニ革マル。世基氏ノ人ヲ知

義詮ノ善ク人ニ仕ルヲ稱ス。○二十三年、北朝應安元年、三月十一日、天皇住吉殿ニ崩ス、壽四十一。○長慶天皇、諱ハ寛成、後村上天皇第一ノ皇子也。○天皇行宮ニ於テ即位、皇弟熙成親王ヲ以テ皇太弟ト爲ス。○七月、新田義宗、脇屋義治、兵ヲ越后上野ニ起シ、上杉憲將ト戦フ、克クシ、義宗之

死シ、義治出羽ニ走ル。○二十四年、北朝應安二年、正月、楠正儀、北朝ニ降ル、正儀ノ降ルハ、蓋深謀アリ、亦々南朝ノ爲ニスル也。政記ニ之ヲ論スル詳カナリ。○三月、楠氏ノ族正儀ヲ攻ム。○建徳元年、北朝應安三年、正月、脇屋義

長慶 六

治兵ヲ武藏上野ニ出シテ上杉朝房ト戦フ克タス信濃
ニ走ル後チ其終ル所ヲ知ス○二年北朝應安四年三月
北朝ノ後光嚴帝位ヲ太子緒仁親王ニ禪ル是ヲ後圓融
帝ト爲ス○八月初ノ正儀ノ降ルヤ義滿命ノ河内ニ還
テ吉野ヲ圖ラシム賴之諸國ノ兵ヲ發メ之ヲ援ニ一請
フ諸將肯レセスノ曰必ス功無シト義滿乃チ止ム賴之
言ノ行ハレサルヲ耻チ職ヲ辞メ西山ニ退居ス義滿親
ク臨テ之ヲ起ス於是賴之其義子賴元ヲ遣テ兵ヲ率テ
正儀ヲ援セシム○文中元年北朝應安五年今川貞世大
内義弘ト兵ヲ合メ菊池武政ヲ攻ム武政逆ト戦テ之ヲ

破ル武政ハ武光ノ子ナリ○二年北朝應安六年八月天
皇位ヲ皇太弟ニ禪ル天皇薙髮メ吉野ヲ出テ玉川宮
リニアニ歩リ御ス後チ其崩スル所ヲ知ス
○後龜山天皇 諱ハ熙成
後村上天皇第二ノ皇子也母ハ嘉吉門院○天皇天野ノ
行宮ニ於テ即位○八月賊將細川氏春來リ犯ス大納言
隆俊兵ヲ天野ニ屯シ夜ル賊ノ營ヲ襲フ克タスメ之ニ
死ス帝蹕ヲ吉野山中ニ移ス○天授二年北朝永和二年
七月足利直冬北朝ニ降ル尋テ卒ス○僧絶海明ヨリ還
ル絶海ハ鹿苑ノ僧ナリ先是明ニ往テ禪ヲ學フ明主朱

元璋召ノ之ヲ見問フニ我國ニ徐福ノ祠アルヲ以テス、
 絶海詩ヲ賦ノ曰熊野山前徐福祠、滿山藥草兩餘肥、只今
 海上波濤穩、萬里好風須、早歸明主之ヲ賞ノ、其韻ヲ和ス、
 ○三年 北朝永和三年 八月、菊池武朝、懷良親王ヲ奉ノ大
 内義弘ト戰テ大ニ敗レ、其族百餘人之ニ死ス、先是武政
 卒シ、武朝嗣テ肥後守ト爲レリ、○四年 北朝永和四年 三
 月、義滿邸ヲ室町ニ造リ、多ク名花ヲ種ユ、時人稱メ花御
 所ト曰フ、又室町殿ト曰フ、○九月、菊池武朝、懷良親王ヲ
 奉シ、今川貞世ト訕磨原ニ戰テ之ヲ破ル、○五年 北朝康
 曆元年 正月、山名義理、山名氏清入テ寇ス、楠氏ノ族橋本

正時、神宮正種等、土丸城ニ據テ拒戰ス、城遂ニ陷ル、尋テ
 藤波石垣ノ城亦陷ル、○三月、義滿既ニ長メ、自ラ事ヲ用
 ヒ、賴之ニ聽カス、稍人心ヲ失フ、氏滿鎌倉ニ在テ之ヲ聞
 キ、陰カニ異志ヲ蓄フ、是ニ至テ謀稍ニ泄ル、義滿手書ヲ
 其執事上杉憲春ニ與ヘテ之ヲ讓ム、憲春即チ氏滿ヲ諫
 ム、氏滿聽カス、憲春憂懼ニ堪ハス、切諫ノ自殺ス、氏滿驚
 テ且悔エ、遂ニ其謀ヲ止メ、其子憲房ヲ以テ執事トナス
 ○四月、義滿、細川賴之ノ職ヲ罷ム、先是、義滿室町ノ第ヲ
 起シ、驕奢稍ニ甚シ、賴之屢ニ諫ムレ、氏聽カス、近臣等從
 テ其專權ヲ諳ス、義滿稍之ヲ忌ミ、是ニ至テ兵ヲ募府ニ

後龜山 八

集メ使ヲ賴之ノ邸ニ遣テ其職ヲ罷メテ國ニ就カシム、
 賴之命ヲ聞テ即日途ニ上リ讚岐ニ還テ髮ヲ削リ常久
 ト稱ス詩ヲ賦メ曰人生五十愧無功花木春過夏已中滿
 室蒼蠅掃難去起尋禪榻臥清風已ニ義滿其功ヲ思ヒ
 南海ヲ總管セシム或ハ云賴之威權ヲ義滿ニ讓ラント
 欲シ密カニ義滿ト議メ此ニ及フト○六年北朝康曆ニ
 年五月小山義政兵ヲ下野ニ起シ宇都宮基綱ト戰テ大
 之ヲ破リ基綱ヲ斬ル○是年和田正武病テ卒ス○弘
 和元年北朝永徳元年楠正儀歸順ス○二年北朝永徳ニ
 年閏正月楠正儀山名氏清ト平尾ニ戰テ敗績ス已ニ

正儀病テ卒ス○四月北朝ノ後圓融帝位ヲ皇太子ニ禪
 ル是ヲ後小松帝ト爲ス是歲山名氏清悉ク和泉紀伊ヲ
 略シ吉野獨リ行宮ニ属スルノミ○三年北朝永徳三年
 四月小山義政足利氏滿ノ兵ト戰テ之ニ死人其子若犬
 丸逃凶ニ後チ田村則義小田五郎ト兵ヲ起シ常陸穴戸
 ノ男體山ニ據ル上杉朝宗之ヲ攻メ元中五年城遂ニ陷
 ル○元中三年北朝至徳三年足利義滿庶苑院相國寺ヲ
 創シテ成リ又禪寺五山ノ班位ヲ定ム鎌倉ノ五山亦同
 シ○六年北朝康應元年先是義滿紀伊及ヒ駿河ヲ巡遊
 ス蓋シ東南ヲ圖ルナリ是歲又々西遊ノ嚴嶋ニ至リ遂

國史要略 卷七

○後龜山

九

鎮西ヨリ讃岐ニ過テ、細川賴之ヲ見、人ヲ屏ケテ共ニ
語ル、稍久シ、共ニ巖嶋ニ至リ、別レテ京師ニ還ル、亦夕
圖ル所アルナリ。○八年北朝明德二年春、細川賴之ヲ京
師ニ召シ還シ、其子賴元ヲ管領ト爲シテ、賴之事ヲ決ス。
○十二月、山名氏清亂ヲ作ス、義滿討テ之ヲ誅ス、初ノ山
名時氏、五州ノ守護ト爲リ、其子師義、山陽ヲ略シ、氏清ニ
至テ又南海ヲ取ル、於是山名氏ノ領スル所、十州ニ跨ル、
世呼テ六分一氏ト稱ス、海内ヲ六分ノ其一氏清富強ヲ
恃テ驕傲、幕府ヲ輕蔑ス、義滿之ヲ惡シ、常ニ之ヲ誅鋤セ
ン、子滿幸謀ル、適シ師義ノ子滿幸罪アリ、因テ其守護ヲ奪

テ、滿幸慚恚シ、堺城ニ至テ氏清ヲ見、之ニ反テ勸ム、氏清
元ヨリ怨望スル所アリテ、異志ヲ蓄フ故ニ速カニ諾ス、
滿幸丹波ノ兵ヲ以テシ、義理紀伊ノ兵ヲ以テシテ、並ヒ
之ニ應シ、是月、氏清進テ男山ニ屯ス、義滿自テ出テ一
色氏範ノ第三陣ニ、諸將ヲ分テ内野及ヒ東寺ニ陣セシ
メ、大内義弘ヲ以テ先鋒ト爲ス、戰方ニ合シ、義弘殊死ノ
戰ヒ、其前軍ヲ破ル、氏清ノ全軍來リ撃ツ、義弘創ヲ蒙テ
奮進ス、一色詮範來リ援ケ、遂ニ氏清ヲ斬ル、賴之基國等
亦滿幸ノ軍ヲ破ル、滿幸逃走シ、後ヲ捕殺セラル、義理逃
レ、氏冬氏清子降リ、事乃平ラク、山名氏ノ地ヲ以テ諸將

後龜山
十

ニ分千與フ、○九年北朝明德三年五月義滿、畠山義深ヲ
ノ金剛山ヲ攻メシム、時ニ官軍保ツ所、金剛山ノ一城ノ
ニ義深數千騎ヲ以テ之ヲ圍ミ、其糧道ヲ絶ツ、城兵僅カ
ニ數十人、皆飢テ戰フヲ能ハス、逃レテ十津川ニ匿ル、正
成城ヲ築テヨリ、凡ソ六十年、此ニ至テ城遂ニ陥リ、楠氏
亦込フ、○十月義滿、大内義弘、六角滿高ヲ使トシ、來テ和
ヲ請テ曰、車駕京ニ還リ、神器ヲ授ルキハ、則チ兩統迭ル
、立ツテ故事ノ如クセント、詔ノ之ヲ許ス、廿八日、車駕
行宮ヲ發シ、群臣戎服ノ從フ、義滿來降ノ礼ヲ用ント欲
ス、天皇聽カスノ曰、父子ノ礼ヲ以テ相授ク可シ安ソ

屈下ス可シ、六角滿高、義滿ニ謂テ曰、神器彼ニ在リ、真ノ
天皇ナリ、敕ニ違フ可ラス、義滿乃チ駕ヲ奉迎シ、大覺寺
ニ御ス、閏月五日、天皇、神器ヲ後小松天皇ニ授ク、後醍醐
帝南遷ヨリ、是ニ至テ五十七年、南北始テ一統ス、天皇、應
永三十一年、四月十二日崩ス、壽七十八、

○北朝

○光嚴天皇 諱ハ量仁後、伏見天皇ノ皇子ナリ、母ハ
廣義門院藤原氏、貞治三年七月七日崩ス、壽五十
二、元弘元年九月踐阼ス、
○光明天皇 諱ハ豐仁後、伏見天皇ノ皇子、光嚴天皇

ノ同母弟ナリ、康曆二年、六月廿四日崩ス、壽六十
○崇光^{ツギタカ}天皇 諱ハ興仁^{オキヒト}光嚴天皇ノ皇子ナリ、母ハ陽
祿門院藤原氏、應永五年正月十三日崩ス、壽六十
五

○後光嚴天皇 諱ハ彌仁^{ヤスヒト}光嚴天皇弟二ノ皇子ナリ、
崇光天皇ノ同母弟、應安七年正月廿九日崩ス、壽
三十七

○後圓融天皇 諱ハ緒仁^{ヲキヒト}後光嚴天皇第一ノ皇子ナ
リ、母ハ崇賢門院藤原氏、明德四年四月廿六日崩
ス、壽三十六

○後小松天皇 諱ハ幹仁

後伏見天皇ノ玄孫、北朝後圓融帝第一ノ皇子也、母ハ通
陽門院藤原氏、○閏十月五日、天皇土御門殿ニ於テ神器
ヲ後龜山天皇ニ受テ、其位ヲ嗣ク、藤原師嗣、閑白タル
故ノ如シ、○十一月、後龜山天皇、入テ宮中ニ宴シ、留ル
十餘日、歡ヲ盡シ、大覺寺ニ還御ス、尋テ大上天皇ノ尊号
ヲ上ル、○十二月、征夷大將軍義満ヲ左大臣ト爲ス、是月
朝鮮使ヲ遣ハシ、來聘シ、隣好ヲ修ント請フ之ヲ許ス、○
是歲、細川頼之卒ス、頼之端厚ニシテ謀略アリ、好テ書ヲ讀
ミ、詩歌ヲ善クス、職ニ在テ聲績甚著ナル、疾篤シ、義満其

言ント欲スル所ヲ問フ、賴之曰、山名氏已ニ滅ビ、天下復
夕將軍ノ患ヲ爲ス者無シ、臣復何ヲカ言ハシ、義滿親ク
臨テ葬ヲ送ル、聞ク者感泣ス、○應永元年十二月、義滿職
ヲ其子義持ニ讓リ、自ラ太政大臣タラントテ請フ、朝議
謂ラク平清盛ノ後、武家此官ニ任スル者無シ、義滿怒テ
曰、吾今自立テ、細川畠山ノ輩ヲ攝家ト爲スモ、誰カ能ク
之ヲ禁セント、朝廷惧レテ其請ヲ許ス、○二年、義滿太政
大臣ヲ辞シ、髮ヲ削テ道義ト稱ス、入朝スルキハ朝貴ノ
諸臣皆殿ヲ下テ拜跪ス、其親近スル者ヲ稱シ、昵近衆ト
謂フ、百官皆之ヲ畏ル、○四年、義滿別荘ヲ北山ニ造ル、柱

壁戸牖皆塗ルニ金ヲ以テシ、土木ヲ窮極ス、徙テ之ニ居
リ北山殿ト稱ス、今ノ金閣寺大小ノ事皆就テ決テ取ル
又一殿ヲ禁内ニ造リ、朝スル毎ニ燕息ス、小御所ト稱ス、
出游ノ儀、伏上皇ノ行幸ニ僭擬シ、俗呼テ公方ト曰フ、○
十一月、鎌倉管領氏滿卒ス、子滿兼嗣テ管領ト爲ル、時ニ
鎌倉ノ兵力、室町ヨリ盛ナリ、故ニ事皆室町ヲ學フ、初メ
義滿幕府ノ官政ヲ定メ、斯波細川畠山ノ三氏更ルニ管
領ト爲ル、之ヲ三管領ト謂ヒ、山名一色京極佐々木氏赤松更
ルニ侍所別當ト爲ル、之ヲ四職ト謂ヒ、武田小笠原吉良
今川澁川伊勢之ヲ七頭ト謂フ、鎌倉亦之ニ効テ、自ラ

稱ノ公方ト曰ヒ、上杉憲房ノ後世々山内ニ居リ、其兄重
頭世々扇谷ニ居ル、兩上杉ト稱ノ更ル、管領ト爲リ、氏
満ノ弟満直、陸羽ヲ鎮ス、併セ稱ノ三管領ト曰ヒ、千葉小
山長沼結城佐竹小田那須宇都宮ヲ八館ト曰フ、義満使
ヲ遣テ之ヲ詰問スレ、臣服セス、○六年、大内義弘乱ヲ作
シ、周防長門ノ兵ヲ舉テ堺城ニ據リ、潜カニ鎌倉ト謀ヲ
合シテ、京師ヲ攻ントス、土岐詮直、山名時清、兵ヲ舉テ之
ニ應ス、義満出テ、男山ニ陣シ、畠山基國、細川頼元等ノ
諸將ヲ遣テ之ヲ攻ム、十二月、火ヲ縱テ城ヲ焚キ、因テ大
ニ戦フ、義弘遂ニ出テ、走ル、畠山満家闘テ之ヲ斬ル、詮

直時清等皆平ラク、時ニ鎌倉ノ満兼、兵ヲ武藏府ニ出シ、
義満ヲ援クト宣言ノ、潜カニ義弘ニ應ス、義満怒テ鎌倉
ヲ討テトス、上杉朝宗、來テ和ヲ議シ、事遂ニ寢ム、一ヲ得
タリ、○八年、義満使ヲ遣ハシ、好ミヲ明ニ通ス、參議菅原
秀長書ヲ作ル、書辭甚々恭シ、明年、明主ノ答書至リ、義満
ヲ封シ、日本國王ト爲ス、○十五年五月、前征夷大將軍足
利義満薨ス、年五十一、教ノ太上皇ノ号ヲ贈ル、義持、辞メ
受ク、尊氏以來、功臣跋扈シ、叛乱常無シ、義満嗣クニ及テ
軍政ヲ振起シ、倔強ノ徒皆伏ス、然レ豪侈ニシ、土木ヲ喜
ヒ、驕僭ノ甚キ、前古比無シ、明主書ヲ贈テ之ヲ吊シ、諡ノ

恭獻王ト曰フ、其國體ヲ傷ル、亦夕此ノ如シ、○十六年、鎌倉管領滿兼卒ス、子持氏嗣テ管領ト爲ル、○十九年、天皇位ヲ皇太子ニ禪ル、永享五年、十月廿日崩ス、壽五十七、

○稱光天皇 諱ハ實仁

後小松天皇第一ノ皇子也、母ハ光範門院藤原氏、○八月、天皇禪ヲ受ク、年十二、上皇政ヲ院中ニ聽ク、藤原教經關白タリ、二十一年、十二月、天皇太政官廳ニ於テ即位、○二十三年、鎌倉管領持氏、其執事上杉氏憲ヲ罷メ、憲基ヲ以テ之ニ代フ、氏憲怨望シ、持氏ノ叔父滿隆、及ヒ其子滿仲ニ説テ乱ヲ作シ、兵ヲ以テ持氏ノ第ヲ攻ム、持氏駿河ニ

走テ今川範政ニ依リ、之ヲ京師ニ訴フ、○二十四年、正月、義持令ヲ關東ニ下シ、諸將ニ命メ、持氏ヲ助ケ、攻テ鎌倉ヲ復ス、滿隆滿仲及ヒ氏憲等、皆雪下ノ僧舎ニ自殺ス、氏憲髮ヲ削テ禪秀ト号ス、世是ヲ禪秀乱ト謂フ、○二十五年正月、將軍義持、其弟大納言義嗣ヲ殺ス、初メ義滿甚夕義嗣ヲ愛シ、其官爵ヲ超遷シ、軍職ヲ嗣シメントス、巳ニノ薨ス、鎌倉ノ乱起ルニ及テ、京師流言アリ、義嗣謀ヲ氏憲ニ通シ、幕府ヲ襲ハントスト、義持兵ヲ遣テ其第ヲ圍ミ、逼テ髮ヲ削ラシメ、之ヲ相國寺ニ幽ス、是ニ至テ之ヲ殺ス、○二十六年六月、高麗ノ戰艦千三百餘艘、來テ對馬

寇ス九州ノ兵撃テ之ヲ卻ク賊艦海ニ没シ死スル者甚夕多シ是歲明使者來ル去年明主其臣呂淵ヲメ來テ好ヲ通セント請フ許サス是ニ至テ又來リ請フ義持僧西堂ニ命メ使者ニ喻メ曰我國古來外國ニ通セス比口前制ニ違ヒ誤テ封爵ヲ受ケ神明ノ譴ヲ蒙ル故ニ好ミヲ通スルヲ望マス今ヨリ永ク通信ヲ絶ント○三十年二月義持職ヲ辞シ雞髮ノ道詮ト稱ス義持性柔惰時ニ京畿無事ニ屬ス因テ屢ニ三管領四職公卿ノ第ニ游テ宴會ヲ為ス俗之ヲ御成ト稱ス○三十二年將軍義量薨ス年十九義持再ヒ政ヲ執ル○三十四年十月赤松滿祐

乱ヲ作ス巳ニ之ヲ赦ス初メ滿祐父義則ニ嗣テ播磨備前美作三州ノ守護タリ其族持貞甚夕義持ニ寵アリ義持乃チ滿祐カ領スル所ヲ削テ持貞ニ與ヘント欲ス滿祐怒テ其第ヲ燒テ播磨ニ走ル義持諸將ニ命メ之ヲ討レム諸將素ヨリ持貞ノ無礼ヲ惡ム因テ連署メ持貞ヲ罪状シ滿祐ヲ赦シト請フ義持已ムトテ得ス之ヲ許シ持貞ヲノ自殺セシメ滿祐ヲ召シ還ス○正長元年正月前征夷大將軍義持薨ス初メ義持義嗣ノ事ニ懲リ諸弟ヲ以テ皆僧ト為ス義量早世スルニ及テ子無シ衆議メ鎌倉ノ持氏ヲ立ントス持氏之ヲ聞テ喜ヒ自ラ亦夕

立シテ希フ、畠山滿家曰、之ヲ神ニ聽クニ若カスト、乃
チ石清水ニ詣テ闡ヲ探リ、義圓ヲ得タリ、因テ之ヲ立ツ、
義圓ハ義持ノ同母弟ナリ、名ヲ義教ト改メ、即日ニ叙爵
ス、持氏はニ由テ義教ト隙アリ、○七月二十日、天皇崩ス
壽二十八、嗣ナシ、上皇議ノ崇光帝ノ曾孫茂仁親王ヲ立
ツ、初崇光帝南遷ノ時、後光嚴帝弟ヲ以テ立チ、傳ヘテ稱
光帝ニ至ル、故ヲ以テ崇光帝ノ子孫退テ伏見ニ潜居ス、
是ニ至テ出テ、皇統ヲ受ルヲ得タリ、時ニ後龜山帝ノ
皇子小倉宮立ツ、ヲ希テ得ス、怒テ伊勢ニ走ル、明年北
畠氏之ヲ奉メ兵ヲ起ス、足利氏撃テ之ヲ平ラケ、皇子ヲ

嵯峨ニ置ク、
○後ゴ菴園アムヅ天皇 諱ハ茂仁
崇光天皇ノ皇曾孫ニシテ、貞成親王ノ皇子ナリ、母ハ敷政
門院幸子源氏、○七月天皇踐祚ス、甫テ十歲、關白持基攝
政タリ、上皇後小松上皇政ヲ院中ニ決ス、○永享元年三月、足
利義教ヲ以テ征夷大將軍ト爲ス、時ニ朝議謂ラク、正長
ノ紀号、王室將家ニ於テ皆凶ナリト、因テ永享ト改ム、鎌
倉ノ持氏將軍タルヲ得サルヲ愠リ、猶ヲ正長ノ号ヲ
用ユ、侍臣ニ謂テ曰、吾レ豈ニ還俗將軍ノ命ヲ用ヒシヤ、
義教亦夕已レニ服セサル者多キヲ知り、銳意ニ治ヲ圖

ル、○四年秋、義教巡遊ノ駿河ニ至リ、今川範政ノ第ヲ館ト爲ス、富士岳ヲ觀ルニ託メ、實ハ鎌倉ヲ伺察スルナリ、○五年義教使ヲ明ニ遣リ、明使我カ使ト共ニ來ル、明年復タ使ヲ遣ハシ銅錢三十萬緡ヲ義教ニ贈ル、其贈ニ報スルナリ、○十年九月、鎌倉管領持氏、其執事上杉憲實ト隙ヲ生シ、憲實上野ニ走テ平井城ニ據ル、十月義教令ヲ關東ニ下シ、兵ヲ發メ憲實ヲ助ケテ持氏ヲ擊シム、十一月、持氏ヲ永安寺ニ囚フ、○十一年二月、攻テ持氏ヲ殺シ、上杉氏ニ命メ、關東ヲ管領セシム、初メ持氏將軍タルヲ得サリシヨリ、常ニ憤々トメ義教ヲ輕蔑シ、其令ニ從ハ

ス、憲實屢々諫レヒ聽カス、上杉憲直ナリナラ一色直兼ナリナラ因テ憲實ヲ持氏ニ讒ス、已ニ持氏二人ヲ兵ヲ徵サシム、鎌倉流言アリ、憲實ヲ誅スルナリト、府下大ニ騷キ、兵士大ニ山内ヤマノウチニ集ル、持氏惧レテ自ラ山内ニ往テ憲實ヲ諭シ、罪ヲ憲直ニ歸メ之ヲ逐フ、憲直逃レテ藤澤寺ニ入ル、事乃チ釋クルヲ得タリ、十年、持氏其子賢王ニ冠ス、礼ヲ鶴岡ノ祠ニ行ヒ、義家ノ故事ニ循ハントス、憲實諫テ曰、宜ク舊例ニ從テ使ヲ京師ニ遣リ、將軍ノ偏名ヲ受クヘシ、持氏聽カスノ曰、彼ノ將軍、何ソ我子ニ冠スルヲ得ンヤ、遂ニ祠前ニ冠シ、名ヲ義久ト命ス、諸將皆賀ス、憲實獨リ疾

ト稱メ賀セス、持氏怒テ之ヲ誅セントス、憲實出テ、上野ニ走り、平井城ニ據テ、之ヲ京師ニ訴フ、義教乃チ奏メ詔及ヒ錦旗ヲ請ヒ、上杉持房教朝ヲ將ト爲シ、道ヲ分ツテ進ミ、憲實ヲ助ケテ之ヲ討ツ、持氏兵ヲ分テ之ヲ拒ク、關東ノ將士多ク叛テ憲實ニ應シ、每戰皆敗レ、持氏ノ兵散リス、持氏窮蹙シ、遂ニ髮ヲ削テ降ヲ乞フ、憲實之ヲ永安寺ニ幽シ、憲直直兼ニ迫テ自殺セシメ、盡ク其從士ヲ殺ス、乃チ使ヲ京師ニ遣テ、持氏ヲ宥サントヲ請フ、義教聽カス、是ニ至テ兵ヲ遣テ永安寺ヲ圍ム、持氏火ヲ縱テ其妻ト共ニ自殺シ、其子義久、憲實ノ家ニ自殺ス、年十一、

憲實ニ命メ管領タラシム、憲實固ク辞シ、弟清方ヲノ家ヲ嗣シメ、雉鬘ノ伊豆ノ國清寺ニ退居ス、○十二年正月、結城氏朝故管領持氏ノ子春王安王ヲ奉メ兵ヲ起シ、上杉氏ヲ討ツ、持氏ノ死スル、其乳母二子ヲ携テ日光山ニ匿ル、氏朝其子光久ヲ遣テ之ヲ迎ヘ、兵ヲ舉テ城ニ據リ、野田右馬助ヲノ古河城ニ據テ應援ヲナサシム、持氏ノ遺臣、一色大井吉見等ノ諸族並ヒ起テ之ニ應ス、事京師ニ聞ユ、義教乃チ上杉持房ニ命シ、東國ノ兵ヲ發シ、清方ヲ助テ之ヲ討シム、○七月上杉清方諸國ノ兵ヲ率テ結城ヲ攻ム、憲實亦タ義教ノ命ヲ以テ出テ小山ニ陣メ、軍

事ヲ經紀ス、氏朝士卒ヲ督勵ノ固ク守リ、小山宇都宮里見ノ諸族カヲ戮セテ拒戰シ、屢、上杉ノ軍ヲ破ル、清方等拔クヲ能ハス、○嘉吉元年四月清方等諸軍ヲ督ノ城ヲ攻メ、風ニ乘ノ火ヲ放ツ、烟焰城ヲ蔽フ、諸軍乘ノ奮撃シ、城遂ニ陥ル、氏朝父子諸族皆之ニ死シ、古河城亦夕陥ル、春王安王女装ノ逃ル、長尾因幡ノ爲ニ獲ラル、長尾護送ノ美濃ノ垂氷ニ至リ、義教ノ使ニ遇フ、乃チ之ヲ金蓮寺ニ斬ル、二孤正坐ノ及ヲ受ク、春王年十三、安王年十一、其弟永壽王五才、幼ヲ以テ免ル、ヲ得タリ、○五月將軍義教其弟義昭ヲ殺ス、義昭嵯峨大覺寺ノ僧正タリ、後龜

山帝ノ皇子ト親善トシ、關東ノ兵起ルヲ聞テ、皇子ニ勸メ、是時ニ乘ノ宿志ヲ遂ケシム、密カニ人ヲ遣テ菊池ヲ誘フ、菊池答テ曰、結城ノ城、下ラサルニ歳、天下必ス動搖セシ、因テ兵ヲ起ス可シ、義昭竊カニ髮ヲ蓄フ、已ニノ事覺ハレテ逃凶ス、乃チ其形ヲ圖メ諸國ニ索ム、是ニ至テ薩摩ノ人之ヲ殺シ、首ヲ京師ニ送ル、○六月、赤松滿祐大將軍義教ヲ弑ス、初メ義教ノ侍女三人、罪有テ死ヲ賜フ、滿祐ノ女モ與レリ、滿祐怨望シテ其邑ニ走ル、乃チ兵ヲ遣テ之ヲ攻ム、滿祐髮ヲ削テ謝ス、因テ之ヲ宥ス、滿祐軀短ナリ、義教常ニ戯レ呼テ、三尺入道ト曰ク、持貞ノ從子

貞村姿色アリ義教甚々之ヲ寵シ、滿祐ヲ疏斥ス、滿祐怒
ヲ積ム然、臣聲色ニ顯サス義教遂ニ其領スル所ノ三州
ヲ割テ、貞村ニ與ント欲ス、滿祐ノ從子教祐、其議ヲ聞テ
之ヲ滿祐ニ告ク、滿祐大ニ恚リ、其子教康、家臣渥美小五
郎等ト密カニ逆謀ヲ定メ、義教ヲ迎ヘテ其第ニ饗ス、甲
士數十人ヲ伏セ、盛宴ヲ設ケ散樂ヲ張ル、日方ニ暮ント
ス、俄ニ厩馬ヲ放テ、第中騷擾、因テ門ヲ閉ツ、伏兵忽發シ、
教康、教祐直ニ進テ、左右ヨリ義教ノ手ヲ執テ之ヲ伏ス、
渥美屏後ヨリ出テ、其首ヲ斬ル、滿坐錯愕ノ出ル所ヲ
知ズ、刀ヲ拔ク者ハ皆殺サル、斯波義廉、大内持世、創ヲ蒙

リ、細川持之、細川持常等ト垣ヲ越テ逃レ去ル、滿祐父子
其邸ヲ焚テ播磨ニ走リ、義教ノ首ヲ攝津ノ崇禪寺ニ葬
リ、遂ニ白旗城ニ據ル、義教年四十八、先是幕府ノ空室中
ニ、偶人數十アリ、猿樂ヲ爲シ、鶺鴒ノ舞ヲ奏ス、衆就テ之
ヲ執テ、四散ノ見エス、此日樂ヲ爲シ、鶺鴒ニ至テ弒セラ
ルト云、諸將相議メ、子義勝ヲ立ツ甫テ八歳、○八月義勝
ニ敕メ、滿祐ヲ討シム、細川持常、赤松貞村、武田信賢、山名
持豊及ヒ其族、教清等兵凡ソ五萬人、道ヲ分テ進ム、
滿祐貞村カ來ルト聞テ大ニ喜ビ、之ヲ蟹坂ニ逆ヘ撃テ
大ニ之ヲ破ル、持常總督タリ、滿祐ト姻アルヲ以テ、逗撓

ノ進マス、已ニ持豊美作ヨリ、險隘ヲ破テ播磨ニ入り、
進テ諸砦ヲ陷レ、白旗城ニ至ル、諸軍尋テ進ニ城兵逃降
略、盡キ、満祐渥美等皆自殺ス、教康北畠氏ニ走ル納レ
ス、遂ニ死ス、教祐走テ少貳嘉頼ニ歸ス、因テ大内教世ニ
命ノ之ヲ討シム、教祐嘉頼ト對馬ニ奔ル、其地ヲ教世ニ
賜フ、満祐ノ三國ヲ以テ、持豊等ニ分チ賜フ、明德應永ノ
二役ヨリ、山名大内皆微ナリ、是ニ至テ復興ル、○三年七
月、將軍義勝馬ヨリ墜テ薨ス、弟義成ヲ立ツ、生レテ八歳、
後チ義政ト改ム、○九月、南朝ノ遺臣、藤原有光、藤原資親、
楠二郎正光等、後龜山帝ノ皇子金藏主ヲ奉ノ主ト爲レ

中興宮ト稱シ、兵三百人ヲ集メ、夜ル禁中ニ入テ火ヲ縱
チ、神器ヲ奪ヒ去リ、遂ニ叡山ニ據ル、明年、畠山基國兵ヲ
遣テ之ヲ討チ、山徒ニ説テ内應ヲ爲サシム、皇子自殺シ、
有光資親正光等皆死ス、鏡劔ヲ獲タリ、神璽ハ二郎カ兵
奪ヒ去テ吉野ニ入り、南朝ノ皇孫ヲ奉メ吉野ヲ保ツ、後
チ長祿元年、赤松氏ノ遺臣、間島三郎、中村八郎、偽ハツテ
吉野ニ仕ヘ、皇孫ヲ殺シ、神璽ヲ奪ヒ、還テ之ヲ獻ス、○文
安二年、畠山持國ヲ罷メ、細川勝元ヲ管領ト爲ス、時ニ年
十六、○是歲鎌倉ノ將士相議シ、故ノ持氏ノ子永壽ヲ奉
メ鎌倉ノ主ト爲シ、憲實ノ子龍若ヲ執事ト爲ス、初メ永

壽逃レテ信濃ニ匿ル、是ニ至テ索テ之ヲ獲タリ因テ之
ヲ京師ニ請フ、義政之ヲ許シ、永壽ニ名ヲ成氏、龍若ニ名
ヲ憲忠ト賜フ、憲實之ヲ聞テ、心自ラ安ンセス、二子ヲ携
テ諸國ヲ巡行シ、後チ周防ニ卒ス、○文安四年十一月、先
是楠二郎ノ弟某、後村上帝ノ皇子、泰成ノ子ヲ奉シ、紀伊
湯淺ノ城ニ據ル、是ニ至テ畠山氏ノ兵、攻テ之ヲ破リ皇
孫ヲ殺ス、楠某之ニ死ス、○宝徳元年四月、義政元服ヲ加
ヘ征夷大將軍ニ任ス、年十五、○享徳三年八月初メ畠山
持國、髪ヲ削テ徳本ト稱ス、二將軍ヲ擁立シ、爵三位ニ至
リ、威權甚タ熾ニシ、頗ル驕恣、公卿及ヒ將士ニ至ルマ

テ、皆之ニ諂事ス、獨リ山名持豊、細川勝元之ト相抗ス、徳
本子無シ、姪政長ヲ養テ嗣ト爲ス、已ニメ子義就生ル、義
就ノ母日ニ政長ヲ譖メ、其所生ヲ立ント欲ス、四月徳本
遂ニ義就ヲ立テ、政長ヲ除ントス、政長逃レテ勝元ニ依
ル、勝元持豊ト之ヲ援ケ、畠山ノ家臣皆往テ之ニ從フ、京
師騷然タリ、是月、諸將皆幕府ヲ守衛ス、獨リ持豊勝元往
カス、其夜徳本ノ第ヲ焚ク者アリ、徳本走テ其族滿則ノ
第ニ入り、義就河内ニ走ル、徳本遂ニ人ヲ以テ勝元ニ謝
シテ又政長ヲ立ツ、幕議謂ラク徳本ノ第ヲ燒クハ持豊
勝元ノ所爲ナリト、勝元罪ヲ其臣磯谷ニ歸シ、之ヲ斬テ

以テ謝ス、義政又持豊ヲ誅セントス、勝元之ヲ赦シテ
請ヒ、持豊亦タ誓書ヲ献シ、退テ但馬ニ居ル、事遂ニ釋ク
○十二月、鎌倉ノ成氏、其執事上杉憲忠ヲ殺ス、成氏已ニ
長シ、上杉氏カ其父ヲ殺スヲ怨ミ、結城成朝、里見義實等
カ父亦タ上杉氏ノ爲ニ殺サル、故ヲ以テ猜疑日ニ深シ、
上杉道朝、長尾昌賢等密カニ上野ニ往キ、兵ヲ舉ント謀
ルヲ聞キ、結城里見等、成氏ニ勸テ先ツ發セシム、是月力
士ヲ門側ニ伏セテ、憲忠ヲ召シ、擊テ之ヲ殺ス、長尾昌賢
等、憲忠ノ子房頭ヲ以テ管領ト爲シ、扇谷ノ定正ト共ニ
成氏ヲ攻ム、成氏擊テ之ヲ破ル、是ヨリ屢ニ武藏相模ノ

間ニ戰フ、成氏後チ走テ古河城ニ據ル、○康正元年、山名
持豊、播磨守護赤松則尚ヲ殺ス、先是畠山徳本赤松氏カ
功臣ノ後ナルヲ以テ、満則ノ子五郎則重ヲ立テ、邑ヲ
播磨ニ與フ、持豊怒テ曰、吾レ功ヲ以テ受ル所、豈ニ賊ノ
後ヲ容ル可シヤト、兵ヲ發ノ則重ヲ殺ス、是ニ至テ細川
成之、持豊カ譴ヲ蒙テ退居スルヲ幸トシ、義政ニ請テ赤
松則尚ヲ播磨ノ守護ト爲ス、持豊又タ大ニ怒リ、逆ニ擊
テ則尚ヲ殺ス、幾クモ無ノ持豊赦サレテ京師ニ還ル、義
政其罪ヲ問ハス、持豊勢威益々熾ナリ、髮ヲ削テ宗全ト
稱ス、宗全長身ニシテ面赤シ、人呼テ赤入道ト曰フ、○寛正

後卷四

二年十月、義政其弟政知マサトモヲ關東ニ遣ル、先是成氏兩上杉氏ト戰爭止マス、今川氏範、兩上杉ヲ援シ、成氏破レテ古河城ニ據ル、千葉結城、小山宇都宮ノ諸族、之カ應援ト爲リ、勢又夕振フ、兵結テ解ケス、是ニ至テ房頭定正相議メ、主帥ヲ置ンテ京師ニ請フ、義政乃チ其弟天龍寺ニ在ル者ヲノ髮ヲ蓄ヘシメ、名ヲ政知マサトモト命メ、關東ニ遣ル、兩上杉之ヲ伊豆ノ堀越ニ奉メ、堀越御所ト稱ス、然レ關東ノ將士多ク成氏ニ歸メ、政知ニ附ク者少ナリ、是時ニ當テ比年凶荒、加ルニ兵革ヲ以テシ、飢民道路ニ盈ツ、而テ義政大ニ第宅ヲ營ナシ、靡麗ヲ窮極ス、帝之ヲ憂ヘ、詩ヲ

賦メ、義政ニ賜フ曰、殘民爭採首陽薇、屢々閉爐鎖、竹扉詩與吟酸、春二月、滿城紅綠爲誰肥、義政之力爲ニ役ヲ罷ム、
 ○寛正四年、先是畠山德本已ニ死シ、義就亦夕京師ニ還テ親近セラル、政長安シセス、出テ、大和ニ走ル、義政之ヲ和解メ共ニ京師ニ居ラシム、已ニノ義就昔ニ忤ヘ、復夕河内ニ走ル、義政怒テ政長ニ命メ之ヲ攻メシム、細川勝元兵ヲ遣テ政長ヲ援シ、政長若江金胎寺コシノイシノ二城ヲ陷ル、義就岳山ニ據テ拒戦シ、長祿元年ヨリ、是ニ至テ累年下ラス、是歲三月、山名是豊先登メ、義就ト格闘ス、勝敗各七夕ヒ、是豊曰、真ニ吾カ敵ナリ、四月城竟ニ陥リ、義就

走テ吉野ニ入ル、政長凱旋ス、是豊歸テ父ニ語ルニ、義就
ノ勇ヲ以テス、宗全之ヲ嘆賞ス、○五月、義政奏ノ其弟義
視ヲ以テ嗣ト爲ス、初ノ義政藤原重政ノ女ヲ娶ル、富子
ト曰フ、子無シ、其弟僧ト爲テ浄土寺ニ居リ、義尋ト曰フ、
義政之ヲ嗣ト爲ントス、義尋固ク辞メ曰、近日ノ人情、反
覆恃ム可ラス、義政言ハシメテ曰、吾レ如シ男ヲ得ルモ、
即チ僧ト爲レ、誓テ渝ルヲ無レト、義尋乃チ名ヲ義視ト
改メテ、今出川ノ第ニ入り、左馬頭ニ任レ、細川勝元之カ
管領タリ、○七月、天皇位ヲ皇子成仁親玉ニ禪ル、文明二
年、十二月廿七日崩ス、壽五十二

○後土御門天皇

諱ハ成仁

後、蒼園天皇第一ノ皇子ナリ、母ハ嘉樂門院藤原氏、○六
年二月、天皇太政官饒ニ於テ即位、持通関白故ノ如シ、○
十二月、足利義視大納言ニ任レ、從三位ニ叙ス、時ニ紀綱
廢乱ノ賞罰常無シ、近江ノ人、熊谷左衛門尉、好テ書ヲ讀
ミ、天下マサニ乱ントスルヲ知リ、上書ノ極諫ス、義政怒
テ其邑ヲ奪フ、○文正元年、義政ノ夫人富子、去年男ヲ生
シ、義尚ト曰フ、富子之ヲ僧ト爲スヲ欲セス、日夜啼泣
ス、然レ義視ノ約ヲ變シ難ク、勝元又之ヲ輔ケテ搖ス
ヲ得ス、諸將ノ権力アル者ヲ索ルニ、宗全ニ若クハ無シ、

因テ竊カニ書ヲ作シ、之ヲ宗全ニ託ス、初ノ宗全女ヲ以
テ勝元ニ妻ハス、子無シ、宗全ノ子は豊ヲ養テ嗣ト爲ス、
已ニノ子ヲ生シ、是豊ヲ廢ス、宗全悦ハス、又勝元カ赤松
政則ヲ助ルヲ恨ム、因テ義尚ヲ擁立シテ已レ執事タラ
ント欲シ、喜テ富子ノ託ヲ受ク、又畠山義就カ勇ニ勝
元ト相仇トスルヲ知り、援ト爲ント欲シ、富子ニ因テ義
就ヲ宥ントテ請フ、義政之ヲ許ス、時ニ伊勢貞親奏者頭
ト爲テ甚タ威權アリ、斯波氏ノ家宰等、其嗣子義敏ニ服
セス、貞親ニ因テ之ヲ廢センコトヲ請フ、貞親其請ヲ許シ、
義敏ヲ逐テ義廉ヲ立テシム、宗全又女ヲ義廉ニ妻ハス

已ニノ貞親義敏ノ妹ヲ妾トナシ、甚タ之ヲ寵ス、因テ又
義敏ヲ復シ、義廉ヲ廢セシム、宗全聞テ大ニ怒リ、罵テ曰、
貞親一豎子、何ソ敢テ三管ヲ進退スト、乃チ義廉ヲ援シ
テ貞親ヲ攻ントス、京師騷然タリ、四月貞親伊勢ニ走リ、
義敏越前ニ走ル、○十一月宗全使ヲ馳セテ赦ヲ得ルコト
ヲ義就ニ報ス、義就時ニ熊野ニ在リ、報ヲ得テ即チ發シ、
是月京師ニ入テ幕府ニ謁シ、宗全ノ第ニ詣リ、驩ヲ盡メ
還ル、人アリ夜ル義就ノ門ニ書メ曰、右衛門、佐戴ク物が
ニツアリ、山名ノ足ニ御所ノ盃○應仁元年正月、歳首ニ
將軍三管領ノ宅ニ臨テ饗ヲ受ク、古例ナリ、時ニ畠山政

長管領タリ、二日大ニ供具ヲ治テ義政ヲ請フ、義政往カ
ス、政長驚テ曰、吾レ恪勤怠ラサルニ、何ヲ以テ疏ンセラ
ル、蓋シ義就宗全カ讒スル所ナリト、十五日、宗全請テ義
政ヲ饗ス、饗已ニ畢テ、義就義廉等ノ諸將ヲ率テ幕府ニ
詣リ、兵ヲ以テ四門ヲ護シ、義就ヲ本邸ニ納レテ、政長ヲ
逐ハンコトヲ請フ、義政之ヲ許シ、乃チ使ヲ勝元ニ遣テ其
旨ヲ喻ス、勝元肯ンセス、遂ニ政長ト兵ヲ集テ自ラ備フ、
宗全之ヲ聞テ亦夕兵ヲ召ノ幕府ヲ護ル、諸將各、兩所
ニ集ル、義政令ノ曰、義就政長ト手兵ヲ以テ戰フ可シ、諸
將援ルコト勿レ、令ニ背ク者ハ叛ナリ、十八日、義就政長雪

ヲ犯メ出テ御靈林ニ戰フ、兵各數千人、且ヨリ戰テ暮ニ
至ル、義廉潛カニ來テ、義就ヲ援ケ、勝元兵ヲ出サス、故ヲ
以テ政長遂ニ支ルコト能ハス、火ヲ祠宇ニ縱テ走ル、義就
入テ社中ノ焚屍ヲ覩テ、以爲ラク政長戰死スト兵ヲ引
テ還ル、宗全大ニ喜テ兵ヲ罷ム、世勝元ヲ嘲テ怯ト爲ス、
勝元慙テ門ヲ閉テ出テス、宗全意益ニ驕ル、○二月、宗全
其兵ヲ散シ去ル、勝元之ヲ覩ヒ、潛カニ其族帥春元春政
之ト相議シ、領スル所ノ攝津丹後和泉淡路阿波讃岐土
佐備中參河ノ兵ヲ徵ス、於是政長ハ河内紀伊ヲ以テシ、
斯波義敏ハ越中ヲ以テシ、京極持清ハ近江ノ半飛彈出

雲隱岐ヲ以テシ、武田國信ハ若狹安藝ヲ以テシ、赤松政則ハ加賀ヲ以テ皆之ニ屬ス、兵凡ソ十六萬人、宗全之ヲ聞テ亦々其族教幸教清ト共ニ但馬因幡播磨伯耆石見備前美作ノ兵ヲ發シ、義就ハ大和及ヒ河内紀伊ノ故黨ヲ以テシ、畠山義純能登ヲ以テシ、斯波義廉、越前尾張遠江ヲ以テシ、六角高賴、近江ノ半ヲ以テシ、一色義直、丹波伊勢ヲ以テシ、土岐成賴、美濃ヲ以テ皆之ニ屬ス、兵凡ソ十一萬人、兩軍絡繹トメ京師ニ入ル、都下騷擾シ、人民皆老ヲ扶ケ幼ヲ携ヘ、負擔ノ奔逃ス。○五月、義政令シテ曰、先ツ戦フ者ハ我カ敵ナリ、時ニ一色義直幕府ヲ護ス、勝

元兵ヲ遣テ實相院ニ屯メ之ニ逼ル、義直恐レ戦ハスノ走ル、勝元乃チ幕府ニ入テ義政ニ謁シ、其旗ヲ請テ之ヲ四脚門ニ樹テ、義視ヲ迎ヘテ府中ニ入ル、勝元ノ第幕府ノ東ニ在リ、宗全ノ第西ニ在リ、宗全兵ヲ遣テ實相院ヲ攻ム、克タス、是ヨリ東西ノ陣兵ヲ交エ、争戦或ハ昼夜ヲ連テ、火箭ヲ放テ第ヲ焚キ、烟焰ノ中ニ接戦ス、而シテ東軍常ニ勝ツ、勝元又政則ヲ遣テ播磨備前ヲ略メ、其故黨ヲ収メシム。○六月、宗全カ兵一色政氏カ第ヲ燒ク、會ニ風烈延燒スル、數里文武ノ第宅、蕩盡メ遺ル所無シ、兵燹ノ慘極レリ、時ニ大内政弘、兵三万ヲ以テ入テ宗全ヲ援

政則之ヲ厄崎ニ拒テ大ニ破ル西軍復々振へ東軍每
ニ利ヲ失フ○八月東陣流言アリ幕府ノ近臣謀テ西軍
ニ通スル者アリ故ニ敗ルト勝元乃チ其臣安富元綱ト
議シ兵ヲ以テ諸門ヲ扼シ近臣一色政熙上野政直等十
二人ヲ逐ハント請フ近臣皆怒テ曰上ノ意亦夕西ニ属
ス何ソ吾輩ノミナラン今此ヲ以テ故逐セラル死スル
ニ如カス甲ヲ擲ノ出テ戰ハントス吉良義信等之ヲ止
レ臣聽カス時ニ勝元帝及ヒ上皇ヲ幕府ニ迎へ政長乘
輿ヲ護ノ門ニ至ル府中喧噪入ルヲ得ス輿門外ニ留
ルヲ午牌ヨリ夜ニ至ル已ニノ義信等義政ノ旨ヲ以テ

近臣ヲ諭シ稍ク定リ收熙等十二人遂ニ西陣ニ奔ル乘
輿乃チ府ニ入ルヲ得タリ蓋シ勝元ノ意義政若シ西
軍ヲ助ケハ已レ天子ヲ挾テ号令セント欲スルナリ○
九月西軍ノ將義就政弘成頼等ノ五人兵數萬ヲ以テ相
國寺ヲ攻ム武田信賢京極持清等皆潰へ走ル安富元綱
三千騎ヲ以テ門ヲ守ル元綱驍勇善ク戰ヒ政弘成頼ト
拮鬪數合敵進ムト能ハス已ニノ寺僧西軍ニ應メ火ヲ
縱チ敵東門ヨリ入ル元綱兄弟奮戰メ死ス西軍ノ五將
入テ相國寺ニ屯ス政之乃チ勝元ニ説テ曰敵相國寺ヲ據
ルハ我レ釜中ノ魚ノ如シ速カニ擊テ之ヲ走ラス可

勝元因テ政長ニ命シ、部將東條近江ヲ以テ援ト爲ス、
敵衆甚タ盛ナリ、諸人我カ兵寡キヲ以テ之ヲ危フム、政
長鞍ニ據テ顧テ曰、百萬ノ敵ト雖モ、政長往ケハ必ス之
ヲ破シ、諸君之ヲ觀ヨ、進テ其陣ヲ突ク成賴高賴等大ニ
破レテ走ル、義就進テ戰ント欲ス、潰兵嗔咽戰ヲ得スノ
退ク東軍復タ相國寺ヲ取ル、政長ノ勇名益々震ノ○時
ニ伊勢貞親、歸テ勝元ニ依ル、勝元其職ヲ復セント請フ、
義視元ヨリ貞親ノ人ト爲ルヲ惡ミ、且其離間セラレニ
一ヲ恐レ、竊カニ出テ北畠教親ノ營ニ到テ其情ヲ告ケ、
共ニ伊勢ニ走ル、○二年四月、義政書ヲ以テ義視ヲ招キ

還ス、義視猶ナ孤疑ノ決セス、勝元政長等連署ノ之ヲ請
フ、乃チ諾ス、○九月、義視京師ニ還ル、會ニ流言アリ、勝元
義政ヲ廢シ、義視ヲ立シテ謀ルト、義政大ニ疑惧ス、勝
元謂ラク、義視ヲ西陣ニ納ル、片ハ憂無エト、乃チ武田
信賢ニ命シ、義視ヲ將ヒテ叡山ニ上ラシム、宗全果ノ喜
ヒ、兵ヲ以テ之ヲ迎ヘ、斯波氏ノ第ニ居ラシム、是ヨリ兩
陣將軍兄弟ノ争戰ニ似タリ、○文明元年三月、勝元兵ヲ
遣テ夜ル宗全カ營ヲ襲ヒ火ヲ縱テ之ヲ攻ム、宗全親ク
薙刀ヲ執リ庭前ニ戰ヒ、擊テ之ヲ卻ク、○秋、大内政弘ノ
臣、二尾加賀守乱ヲ作シ、勝元ニ應シ、少貳教賴亦タ兵ヲ

起ノ筑前ヲ侵シ、舊土ヲ復セント謀リ、西州大ニ乱ル、政弘之ヲ聞テ、兵ヲ引テ周防ニ還ル、於是西軍勢ヲ失フ、○三年正月、去年十二月、後卷園上皇室町ニ崩ス、是月上皇ヲ葬ル、百官散亡シ、葬儀備ラス、義政徒步ノ奉從ス、○斯波氏ノ家宰甲斐某、其主ヲ弑シ、越前ヲ奪フ、朝倉敏景京ニ在テ之ヲ聞キ、馳セテ越前ニ還テ甲斐ヲ誅ス、義政乃チ敏景ヲノ越前ヲ領セシム、於是其宰織田信秀亦夕尾張ヲ取ル、義政其罪ヲ問ハス、○是歲、關東ノ上杉顯定、攻テ古河城ヲ拔ク、成氏下總ニ奔テ、千葉孝胤ニ依ル、○四年、畠山義統東陣ニ降ル、於是北國ノ糧道通シ、西軍益シ

勢ヲ失ヒ、逃降相踵ク、○五年三月、山名宗全死ス、年七十、○五月、細川勝元死ス、年四十四、其子政元嗣ク、東西ノ軍已ニ首將ヲ失フト、雖氏猶對陣相抗シ、戰爭止マズ、天朝幕府ノ命令之ヲ奉スル者ナシ、○十二月、大將軍義政職ヲ解キ、子義尚嗣テ征夷大將軍ト爲ル、甫テ九歲、畠山政長管領タリ、七日ニノ職ヲ辞シ、畠山義統ヲ以テ之ニ代フ、東軍ニ降ルヲ賞スルナリ、○六月、義政書ヲ朝鮮ニ贈テ、明ノ勘合ノ印ヲ求メ、明ノ貨宝珍玩ヲ購フ、○七年、義政使ヲ明ニ遣ル、僧ヲ以テ使者ト爲ス、○九年春、車駕宮ニ還ル、○九月、畠山義就河内ニ奔ル、冬、土岐成頼、義視ヲ

奉ノ美濃ニ奔ル、西陣ノ諸將各兵ヲ引テ國ニ歸リ、東陣ノ諸將モ亦皆散ス、應仁元年ヨリ、此ニ至テ凡ソ十一年、兩陣ノ兵互ニ相焚掠シ、文武ノ邸宅、神祠佛宇、蕩ノ荒野ト爲リ、公卿百官、四方ニ逃散シ、歷朝ノ典籍、皆兵火ニ罹リ、京師ノ衰替、古ヨリ未タ有ラサル所ナリ、而シテ義政恬然トシテ顧ミズ、使ヲ明ニ遣ハシテ海外ノ珍玩ヲ求メ、游宴自若タリ、○十年十月、足利成氏上杉顯定ト和シ、復タ古河城ニ還ル、顯定上野ノ平井ニ居テ、八州ヲ管領ス、稱ノ山内公ト曰フ、扇谷ノ上杉定正、相摸ノ大場ニ居リ、顯定ニ屬ス、其臣太田持資才略有リ、内國政ヲ修メ、外軍旅

ヲ總ヘ、恩威並ヒ行ハレ、將士稍ク山内ヲ背テ扇谷ニ歸ス、顯定遂ニ定正ト隙ヲ生メ兵ヲ構フ、然レ志ヲ得ズ、甚ク持資ヲ忌ム、持資髮ヲ削テ道灌ト稱ス、○十一月、義政別業ヲ東山ニ造リ、銀閣ヲ建テ、北山ノ金閣ニ擬シ、古器名画ヲ蓄ヘ、日ニ茗宴ヲ以テ樂ト爲ス、世ニ東山殿ト稱シ、髮ヲ削テ道慶ト曰フ、○十三年夏、前関白兼良薨ス、兼良博洽ヲ以テ稱セラレ、著ハス所公事根元、卷鳥餘情寺アリ、○十八年春、細川政元管領タリ、七月上杉定正、其將太田道灌ヲ殺ス、先是顯定陰カニ道灌ヲ除カント謀リ、人ヲメ反間ヲ縱タシム、定正遂ニ之ヲ信シ、是月道灌

ヲ招テ宴ヲ設ケ酒酣ニ浴ヲ命シ、人ヲメ刺シ殺サシム、是ヨリ扇谷ノ勢衰フ、道灌文武ノ才アリ、最モ築城ノ術ニ精シ、江戸河越ノ諸城ヲ築ク、初メ江戸城ヲ築ク、地ヲ相テ將ヲ施シ、其地名ヲ土人ニ問フ、對テ曰千代田、曰寶田、道灌喜テ曰、地已ニ美ニ名モ亦嘉ナリト、乃チ之ヲ築ク、○長享元年九月、將軍義尚六角高賴ヲ召ス至ラス、自ラ將トメ之ヲ討ツ、高賴城ヲ棄テ、甲賀山中ニ匿ル、義尚鈎里ニ屯ス、○延徳元年三月、大將軍義尚鈎里ニ薨ス、年二十五、義尚學ヲ好シ、嘗テ前関白兼良ニ就テ治道ヲ問フ、兼良爲ニ樵談治要ヲ著ハシ之ニ贈ル、軍中

ニ在テ猶左氏春秋ヲ講セシメテ之ヲ聽ク、薨スルニ及テ内外哀惜ス、義尚晩ニ名ヲ義熙ト改ム、子無シ、義政乃チ義視ヲ美濃ヨリ召シ、其子義材ヲ以テ嗣ト爲ス、後ニ名ヲ義植ト改ム、○二年正月、前大將軍義政薨ス、義政驕逸度無ク、奢靡ヲ窮極ス、荅亭ノ薨ハ費六十萬緡、高倉亭ノ障子ハ値二萬緡、其他之ニ稱フ、是ヲ以テ賦歛日ニ倍ス、故事ニ富商ノ金ヲ借ル、義満ノ時ハ歲ニ四次、義教ハ歲ニ十二次、義政ニ至テ八月ニ八九次ナリ、又故事ニ大儀アル片ハ諸侯ニ課メ役ヲ助ケシムル、概テ五六年ニ一舉ス、然レ諸侯猶之ヲ患フ、義政ハ五年ニ九舉

ス、故ニ公私共ニ困シ、怨讟四モニ起リ、遂ニ大乱ヲ醸シ
成スト云、○七月義植征夷大將軍ニ任ス○三年正月、前
大納言義視薨ス○四月、足利茶々丸、其父政知ヲ弑ス、北
條長氏討テ之ヲ誅ス、初メ政知二子アリ、長ハ茶々丸、次
ハ義通ナリ、義通ハ後妻ノ所生ニシテ、政知之ヲ愛ス、繼母
茶々丸ヲ讒シ、別室ニ錮スルヲ數年、茶々丸守者ノ怠ル
ヲ伺ヘ、潜カニ出テ、繼母ヲ殺シ、遂ニ其黨ヲ率テ政知
ヲ攻ム、政知自殺ス、時ニ義通年十三、左右之ヲ扶テ、駿河
ニ走リ、今川氏親ニ依ル、氏親ノ將伊勢長氏兵ヲ以テ茶
々丸ヲ誅ス、長氏ハ京師ノ人ナリ、新九郎ト稱ス、伊勢貞

藤ノ子ニシテ、曾テ義視ノ近侍タリ、長氏英邁ニシテ、大志アリ、
應仁ノ末、天下大ニ乱ントスルヲ知リ、関東ニ據テ、霸
ヲ圖ラント欲シ、荒木兵庫多目權平等ノ壯士六人ト、劔
ニ伏テ東行シ、今川義忠ニ依ル、義忠ハ其姊ノ夫ナリ、時
ニ義忠死ノ駿河大ニ乱ル、長氏乃チ氏親ヲ奉メ、國內ヲ
鎮定ス、將士其功ヲ稱シ、八幡山ノ城ニ居ラシム、長享二
年、高國寺ノ城ニ移リ、大ニ政令ヲ修メテ、政知ニ服事ス、
茶々丸ノ乱ヲ聞キ、病ニ託シテ往テ伊豆ノ温泉ニ浴シ、之
ヲ伺テ曰、伊豆取ル可シト、歸テ衆ト之ヲ議シ、乃チ兵五
百人ヲ以テ、直チニ堀越ヲ襲ヒ、火ヲ縱テ之ヲ攻ム、茶々

丸等皆走テ自殺ス、長氏号令嚴明ニシテ、秋毫モ犯サス、民皆悦服ス、時ニ大ニ疫シ病ム者多シ、長氏與フルニ醫藥ヲ以テノ之ヲ撫循ス、遠近相告テ來リ歸ス、長氏堀越氏ノ邑ヲ以テ自ラ給シ、餘ハ取ル所ナク、租税ヲ減シ雜課ヲ除キ、衆皆之ヲ戴ク、ト父母ノ如シ、後葦山ニ移ル、北條ノ疏属、横井掃部助ハ長氏ノ外家ナリ、時ニ葦山ノ北條ノ嗣絶ユ、因テ長氏ヲ養テ嗣ト爲シ、乃チ北條氏ト稱ス、○明應二年、時ニ畠山政長管領タリ、其宿將タルヲ以テ、諸將ヲ輕侮シ、諸將服セス、義就ノ子義豊尤モ之ヲ忌ミ、其驕横ヲ訴テ譽田城ニ據ル、四月、政長將軍義植ヲ奉

之ヲ討チ正覺寺ニ陣ス、細川政元モ亦々政長ト權ヲ爭テ相惡ム、於是謀ヲ義豊ニ通シ、京極山名一色等ノ諸將ト兵ヲ合ノ正覺寺ヲ攻ム、義植身ヲ脱ノ筒井ニ走リ、政長自殺ス、政元京師ニ還テ、諸將ト繼嗣ヲ議ス、時ニ政知ノ子義通、茶々丸ノ乱ヲ脱ノ駿河ヨリ來テ天龍寺ニ在リ、政元乃チ義政ノ遺旨ト稱シ、迎ヘテ之ヲ立ツ、年十五、後ニ名ヲ義澄ト改ム、閏月、兵ヲ遣テ義植ヲ收テ歸リ、之ヲ家臣物部氏ノ家ニ幽ス、六月、義植逃レテ越中ニ奔リ、轉ノ周防ニ赴キ、大内義興ニ依ル、○三年、義澄征夷大將軍ニ任シ、細川政元管領タリ、○四年、北條長氏、小田原ヲ

取テ之ニ據ル、先是長氏小田原ノ城主、大森實賴ト境ヲ
接スルヲ以テ、使ヲ遣ハノ好ミヲ修メ、又定正ニ請テ、助
ケテ頭定ヲ攻ム、定正喜テ之ヲ許ス、實賴諫テ曰、長氏故
無メ我ニ親シム、其意測リ難シ、宜ク之カ備ヲ爲スヘシ、
定正聽カス、遂ニ長氏ト共ニ兵ヲ高見原ニ出シ、頭定ト
荒川ヲ夾テ陣ス、定正進テ川ヲ濟リ、馬ヨリ墜テ死ス、其
子朝良走テ河越ニ歸リ、長氏亦夕萑山ニ歸ル、是ニ至テ
大森實賴己ニ死シ、子藤賴猶弱シ、長氏使ヲ遣ハノ曰、吾
レ數、獵スルヲ以テ、境内ノ獸逃レテ箱根ニ入ル、願ク
ハ獵夫ヲメ其獸ヲ驅ラシメヨト、藤賴之ヲ諾ス、長氏乃

千士卒百餘人ヲメ獵装セシメ箱根ノ險ヲ越エ、先ツ牛
數十頭ヲ以テ、城ニ臨テ之ヲ放キ、兵士其後ニ從テ掩撃
ス、城中大ニ驚キ、藤賴等爲ス所ヲ知ス、出テ三浦ニ走ル、
長氏遂ニ城ヲ取り、其子氏綱ヲメ之ニ居ラシム、是ヨリ
長氏ノ兵威益、熾ナリ、

國史攬要卷之七

國朝
野史
卷之
七

Blank page with a rectangular border.

